

たんせきようかいざい 胆石溶解剤による治療

「胆石がある」と言われた方にとって、「胆石を溶かす薬」というのは、とても魅力的に思えることでしょう。しかし、胆石溶解剤も魔法の薬ではありません。やはり、溶ける場合と溶けない場合があるということです。

もし、溶けないのに、胆石溶解剤を長い間服用していたとしたら、それは無駄なことになります。やはり薬を飲むからには、その長所と欠点について、よく知っておきたいものです。

① どうして胆石を溶かせるのか？

胆石溶解剤の成分は、ウルソデオキシコール酸・ケノデオキシコール酸と呼ばれる物質です。この物質は、洗剤と同じように、油分を溶かし出す作用があります。

この薬を服用すると、肝臓で作られる胆汁内に移行します。この胆汁が流れて、胆石のある胆嚢に達すると、胆石の表面から徐々にコレステロールを溶かし出して行くのです。これが、胆石溶解剤の効果の理由です。

この作用機序から、次の4つがポイントになります。

(1) コレステロールの石でないと効かない

残念ながら、胆石の成分は、コレステロールだけではありません。ビリルビン・カルシウム・さまざまな色素などから出来ている石もあります。従って、少なくとも「コレステロールを多く含む胆石」でないと、いくら服用しても効果は期待できません。

結石の成分は、腹部超音波検査でおよその推定をすることが可能です。ただ、正確な成分は、超音波検査では判らないこともあります。

(2) 大きい石より小さい石の方が有利

コーヒーに砂糖を溶かす時を考えてください。大きな固まりの砂糖を入れるよりも、小さな粒になったものを入れる方が、ずっと早く溶けます。これは、溶けて行く相手と触れ合う面積（表面積）が大きくなるためです。

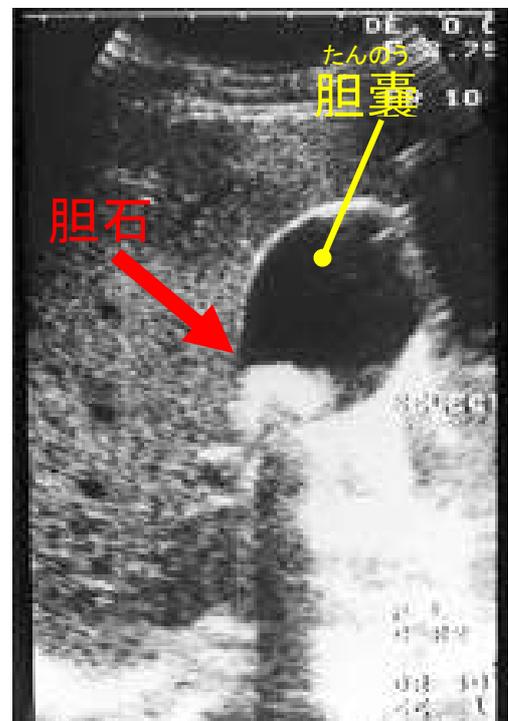
胆石も、小さな砂状のものほど溶けやすいということになります。一般には、直径が2センチを越える石は、なかなか溶けにくいとされています。

さらに、浮遊性胆石と言って、比重の軽い石ほどよく溶けるとされています。

(3) カルシウムで覆われた石には効かない

卵を想像すると判りやすいと思います。表面が堅い殻で覆われていると、中身がいくらコレステロールで出来ていても、中身のコレステロールを溶かし出すことはできません。

石灰分が多いとレントゲンに写るようになります。このため、腹部単純レントゲン検査（造影剤



典型的な超音波検査での胆石像
大きさが18mmの胆石。コレステロールが
主成分の混成石であった(手術症例)。

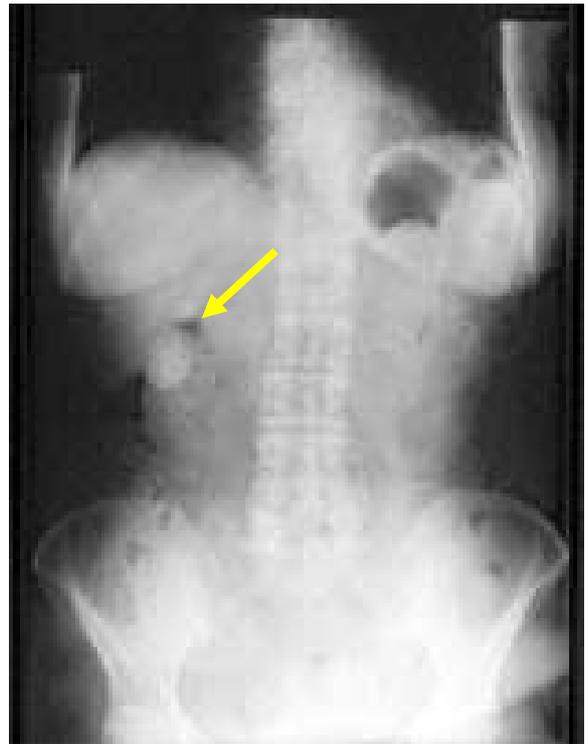
を使わない)で映し出される胆石は、効果が期待できないこととなります。

(4) 胆嚢に胆汁が入らないと効かない

溶かすべき胆石がある場所に、この薬が到達しないと、当然効き目がありません。

正常であれば、胆嚢に胆汁が入らないことはありませんが、胆嚢への出入り口は胆嚢管という細い管です。胆石が原因で炎症を繰り返すと、この部分が更に細くなったり、閉塞してしまうことがあります。となると、もはや自由に胆汁が出入りすることができなくなります。さらに、石がぎっしり詰まっている場合も、ほとんど胆汁は胆嚢に入れません。

これを確かめるには、点滴胆嚢造影というレントゲン検査を行います。これで胆嚢が映し出されれば、胆汁が胆嚢へ出入りしているということになります。



腹部単純レントゲン撮影に写った石灰化胆石

② どのくらい飲めば効く？

早い場合は、3~6ヶ月で完全に胆石が消失する場合があります。一般的には、1年~1年6ヶ月を必要とします。従って、頻繁に腹痛を繰り返す場合は、お勧めできる治療法ではありません。

胆石溶解剤を服用する場合、大切なことは、漫然と服用しないということです。3~6ヶ月毎に腹部超音波検査を行って、結石の大きさが小さくなってきているとか、数が少なくなってきているとか、そういう効果が期待できる状況があれば、服用を続ける価値があります。

また、薬に頼るだけでなく、肥満の改善・低脂肪・低コレステロール食を心がけることも重要です。一旦、無事溶解できたとしても、昔と変わらぬ生活をすれば、早晚再発してしまいます。

③ 副作用はどんなこと？

すでに長年使用されている薬剤で、重篤な副作用の報告はありません。従って、安全性の高い薬とされています。ただし、体質によって、下痢・悪心・嘔吐・胃部不快感などの消化器症状、掻痒・発疹などの過敏症状を起こすことがあります。長期間服用しなくてはならない薬剤ですので、たとえ軽い症状でも、副作用と思う症状があれば無理をしないことが大切でしょう。

森塚クリニック

胃腸科・消化器科・外科・肛門科

〒238-0042 神奈川県横須賀市汐入町 2-7 山下ビル 2F TEL 046-823-0666

森塚 俊彦 Toshihiko MORITSUKA, M.D. & Ph.D.